他 山 の 石 (27)

磐 瀬 太 郎[1)]

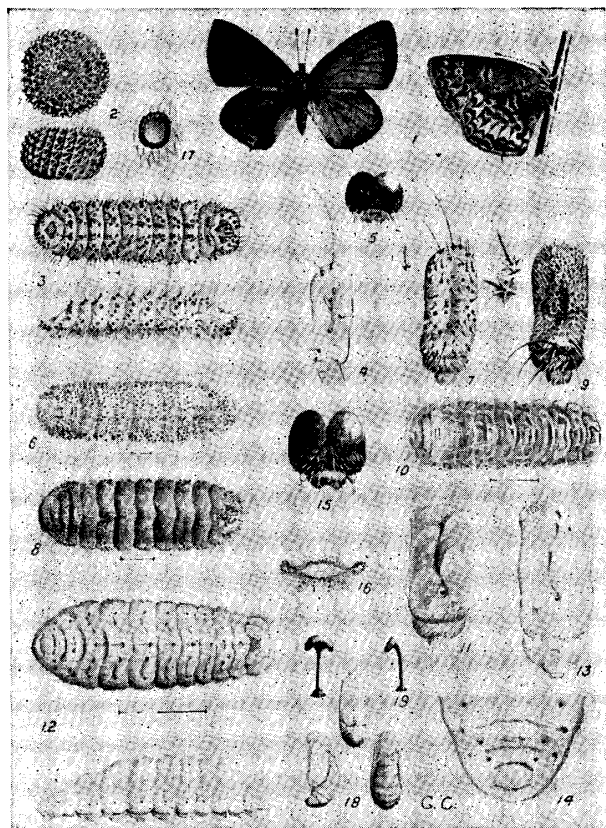
Lessons from Here and There (27)

By TARO IWASE

(27) 野焼きと *Lepidochrysops* アフリカゴマシジミ： ケニヤの首都ナイロビにあるコリンドン博物館の蝶学者 Dr. R. H. CARCASSON の小論文“アフリカ産蝶類の生物地理序説”(1964，東アフリカ野生生物雑誌第2巻)は，全篇みな貴重な文字であるが，30ある分布小区中，熱帯山地草原の説明の中で，次の1節に出会った。曰く，山地草原の多くのチョウは，年々野火の災害のある土地に生育している。例えば山地性 *Lepidochrysops* は，草原が焼かれて後，雨期を前にして羽化する。草原が焼けないと，これらのチョウは羽化出来ないように見える。彼等はアリと共に地下で蛹化する。幼令幼虫期にはシソ科の *Becium* を食べるが，この植物は草原が焼け終わらないと芽を出さない，と。

南アフリカの野焼き Veldburning：CARCASSON は， grass fire はしばしば自然に発火すると述べているが，『南アフリカのシジミチョウ』の著者 D. P. MURRAY は，特に1節を設けて人工的野焼き Veldburning の害を説き，過去においては農業上必要であったろうが，現在ではせいぜいダニ退治位の効果きりなく，土地を荒廃させ，動植物を滅亡させているとして，厳重な取り締まりを要求している。

D. SWANEPOEL の『南アフリカの蝶』を読んでも，この野焼きの風習は猛烈で，政府も禁令を出しているが，なかなかやまない様子である。例えば *L. lacrimasa* の説明の中で，この愛らしいシジミチョウの大敵は火である。年々ナタールからトランスバールにかけての高山の斜面は，無慈悲に焼き払われている，となげいている。(たまたま学名 *lacrimosa* には，涙ぐむという意味がある)。

生活史：75種類もあるこの属のチョウは，大型ではあるがオジロ，スギタニルリ，ジョウザンシジミなどいろいろの種類を連想させる。しかし生活史の大要はゴマシジミと殆んど変わりなく，幼虫は前半は植物，後半はアリの子をたべて育つ。食草の判明している種類は，シソ科の *Becium* を食するもの9種，同じく *Salvia* 1種，Selagineae の *Selago* 5種，クマツヅ

Lepidochrysops patricia
(G. C. C. CLARK による)

1) 東京都文京区湯島2丁目 30—10

ラ科の *Lantana* 3種，マメ科の *Indigofera* 3種である。寄主となるアリは *Plagiolepis* (S. H. SKAIFE による)，*Camponotus* などオオアリ亜科である。しばしば超小型のチョウが羽化するが，これは栄養環境のきびしさを反映している。稀に2化をする種もあるが，原則は1化性である。幼生期の全部が記録されているのは，CLARK と DICKSON (1957) が報告したランタナをたべる *L. patricia* だけと思う。この CLARK の色彩図を縮写してご紹介しておく。彼はイギリスの FROHAWK によって開眼させられただけあって，師匠そっくりの画を描く。(原図の成虫は実物大，開張33ミリ)。

GOWAN C. C. CLARK (1888—1964) のこと：ディクソンと名コンビを組んで南アフリカのチョウ生活史を次々と発表して来た，元鉄道技師クラークは VAN SON の大著（I—III）にも素晴しい生活史の図版を遺して，去る1964年1月他界した。生涯に完成した種類 260 という。*Phasis* を中心とするシジミチョウが特に多く，単行本にまとめて遺稿出版される由。ご冥福を祈りたい。

最後に CARCASSON の文献入手について，原著者を始め今西錦司博士，鈴木晃氏（在タンガニーカ）に心からお礼を申し上げる。（1/XI，1964）

タテハモドキ *Precis almana* の季節型について

原　田　基　弘[1)]

1964年10月18日奄美大島を訪れた際に夏・秋両型の混同するタテハモドキ *Precis almana* LINNAEUS をいくつか採集した。そのうち夏型の2♀を採卵用に生品のまま，東京に持帰り，横須賀久里浜海岸に自生するイワダレソウに強制採卵を試み，数日後百数十卵（2♀共で）を得た。外気の寒さを防ぐ為に，卵はすべてシャーレに入れ，それを室内で飼育した。また夜間，明け方の気温の急激な変化を防ぐために，しばしば石油ストーブを入れた。それでも寒さの為に発育は悪く，相当数が死滅してしまい，1965年1月上旬に残ったわずか7頭の幼虫が蛹化した。このうち4頭は間もなく黒色に変化して死亡，残りの3頭が1965年2月14日に完全な羽化をした。当然秋型である筈の個体が，写真(2)に見られるような「夏型」になっており，興味をひいた。(写真(1)は1964年10月18日，奄美大島赤尾木採集のもの)

キチョウ *Eurema hecabe* や，キタテハ *Polygonia c-aureum* の季節型要因については，すでに東京農工大学の加藤義臣氏（現在京大大学院在学）が実験しておられるが，これら2種の結論として季節型をなす要因は気温よりもむしろ日長時間に左右されることの方が大きいとされている。

たまたま，今回のタテハモドキの飼育では，気温，日長時間の正確な記録は取り損こなってしまった。しかし全ステージを通じて書斉でのシャーレ飼育だったので，電気スタンドは夜間，点されている時間が長く，日中は南側の窓から光が（直接なり間接なりとも）一日中さしこむ状態であった。このことからして考えるとタテハモドキについても季節型変異の大きな要因がキタテハ同様に日長時間にあるような気がしてくる。今更ながら正確な気温，湿度，日長時間のデータを明記しなかったのが惜しまれてならない。出来ることなら，再びタテハモドキについて調べてみたいと思っている。なお筆をとるにあたり次の文献を参考にしました。

Fortunei, No. 2 (1963), No. 3 (1964), 東京農工大学昆虫研究会発行。

1）横浜市港北区篠原町 331